

# 巻頭言

## 撓まず励め

京大院工/ERATO 浜地 格

『このさきがけでは、自分が目指す骨太の研究の第一歩を築くために、10年から20年先を睨んで、結果を恐れ過ぎずにチャレンジして下さい』。5年前に突然の依頼を断りきれず、“さきがけ(1細胞解析のための基盤技術)”の領域総括を渋々引き受けた。240件ほどの応募者から書類と面接選考を経て選んだ、14名の1期生を前にした最初の領域会議でおこなった挨拶の一部を、今でも覚えている。

30年以上前にJSTで始まった“さきがけ”は、特定のコンセプト(キーワード)で表現される研究領域(哲学)の開拓を目指して、幅広いバックグラウンドを持った若手から中堅の研究者が集い、それぞれの研究の夢や将来を議論しながら切磋琢磨するシステムである。近年、キーワードが矮小化され、囲い込みや短期的な出口を意識した領域設定の弊害が目立つと言われてはいるが、それでも若手研究者にとって希望の持てるfundingシステムだという意図を理解して欲しくて、冒頭の言葉となった。本研究会の馬場博士(名古屋大)や津本博士(東大)、昔馴染みの秋吉博士(京大)や野地博士(東大)などのアドバイザーから多大な協力を頂いたおかげもあり、この領域には、多彩なバックグラウンドを持つ若手研究者が集まってくれた。分子や材料を細胞イメージングや培養に展開する研究者をはじめ、個性的な顕微鏡やFACS装置を独自に組み立て細胞やヌクレオソームの観察に挑むもの、DNAバーコードを使って微生物バイオームやマウス個体の細胞系譜を読み解こうとする者、線虫からマウスまで生物個体の行動を光制御して細胞間情報ネットワークに挑もうとする者、1細胞から多細胞への発生や分化にモデル計算も使って挑むものなどなど。毎回の領域会議はさきがけ研究者間で議論が沸騰し、刺激的で楽しく、そしてとても勉強になった。期待した成果が出ず苦しむ研究者、海外bigラボにアイデアをsweepされ落胆する者、想定以上の発展に嬉々とした発表、不意を衝く質問に新しい展開のヒントをもらい驚く顔、その“熱”は日本の若手研究者も捨てたものではないと思わせるに十分であった。何より彼らの専門領域が重なっておらず、むしろ相補的なのが好循環を呼んだ。実際に、総括やアドバイザーの指導なしに、共同研究が自発的にあちこちで始まって発展し、その新しいネットワークから3件のCREST研究が走り始めている。個人的には、直近10年の雑用(?)の中でもっとも充実感を味わえたのだが、ただ残念なことに化学からの応募が予想より遥かに少なかった。この濃密な時間とチームに、生命化学の若手にもっと参加して欲しかったし、それが総括を引き受けた動機の一つであった。最初は、募集の仕方に工夫が足りないのでは、とあれこれ考え、随分工夫も宣伝もしたつもりだったが。。。

さて、井原編集委員(熊大)によると本研究会のニュースレターは丁度60号、人と言えば還暦の区切りであるとのこと。再び赤ん坊となるこの研究会にとって、「10年から20年先を見据えたチャレンジ」は何になるのだろう。私自身は、30年前ぼんやりと考えていた分子夾雑の世界に、今まさに足を踏み入れ、彷徨って

いる。「撓まず励みたい」と想う2020年が始まった。

2019年12月コロナ禍が始まる直前に書いた。。